書評

三品彰英 編
日本書紀研究 第一冊

柴田 実

三品彰英博士を中心に、その友人・門下生らから成る日本書紀研究の小さなサークルの存在は、大阪の直木孝次郎氏らを中心とする続日本紀研究会ほどには、これまで学界に知られていなかったかと思われるが、このたびそのサークル・メムバーの手によってものされた論文十一編を集めて、一巻の成書が公にされた。題して『日本書紀研究』といい、附するに第一巻の文字をもってしていることは、今後さらに第二・第三巻のつづいて刊行せらるべきことを表示したものというべく、われわれはこの研究サークルの将来のさらに大きな発展への期待をこめて、ここにまずもってその初生児誕生を祝いたいと思う。

収載の論文十一編全部の内容を一々ここに紹介することは、紙幅のとうてい許さないところであるが、一おうその題目だけを掲げることにすれば

日本書紀所載の百済王暦　三品彰英
記紀神話形成の一考察　泉谷康夫
大伴金村の失脚　八木 充
祭官成立の意義　上田正昭
蘇我氏の部民支配　日野 昭
欽明朝における百済の対倭外交　笠井倭人
造籍と大化改新詔　岸 俊男
天武天皇の葬礼考　安井良三
隼人造籠考　小林行雄
日本書紀素材論への一つの試み　木下礼仁

以上の目録を一覧してすぐに気づかれることは、従来日本書紀研究といえば、まずそのいわゆる神代巻を中心とする神話的伝承か、もしくはこれにつづく神武紀の建国伝説を主題とするものが大半であったのに対して、本書は泉谷氏の論文一編を除いて、他はほとんどすべて継体・欽明朝以後を取扱っており、その中でもとくに百済との関係に関する研究が四編の多きを占めていることである。それはいうまでもなくサークル・リーダー三品博士の感化が若い研究者の上に及んだおのずからの結果とみるべく、本書の日本書紀研究文献としての評価もまずこの面から取上げられるであろう。

第一、巻頭三品博士の論文は百済王暦に関する日済所伝の不一致点に着目し、これを比較対照しつつ正しい王暦を復原しようとする試みであるが、その方法はただ日済双方の所伝のどちらか一つが正しく、他は誤であると簡単に処理するのではなく、不一致をもたらすようになった双方の事情をともども考察することによって、却ってその背後にかくされている史実をば、明るみに引き出そうとする、柔軟巧妙な考証で、やはり若い研究者には見られない老錬さが感ぜられる。八木氏の論文は従来もっぱら書紀の記述にもとづいて、国内的に氏の構造や国制との関連において理解

されていた大伴金村失脚の理由をば、朝鮮側の史料を利用することによって、より広い視野から検討し、倭国の対朝鮮支配方式が駐屯軍による軍事的直接支配（官家支配）から、日本府による行政的間接的支配に転換した過程をその背景として考えようとするもの、笠井氏の論文はこれと逆に、百済の対倭外交について日系百済官僚が政治・軍事（乞師）両面において大いに活躍した事実を究明している。

つぎに日本史固有の問題について論じたものの中、もっとも雄編はやはり岸俊男氏の所論というべきか。岸氏が古代の戸籍や計帳に見える人名のうち生年十二支に因む命名と考えられるものの多いことに着目し、これを基礎に実際に造籍の行なわれた年次やその信憑性を考証しようとした試みは部分的にすでに二三発表されているが、このたびはいよいよその所論を拡大して造籍・班田等のことが普通信じられているように大化二年、改新詔発布の時期にまでとうてい遡りえないことを極めて綿密精緻な史料考証の上に論究されている。いわゆる大化改新詔本文（主文并に凡条）が決して大化二年発布当初のままのものでなく、後の大宝令もしくは浄御原令に拠って潤色造作された形迹のあることはつとに津田左右吉博士の指摘するところであり、その後の研究者も多くその説を認めつつ、なおその内容に近い新制度（戸籍・計帳をつくり六年一度造籍等）がこのときはじめて打立てられたという点だけは、これを事実とみようとするものが多かったが、今や岸氏のいうところによれば、それは何ら確実な根拠をもたぬ、詔とともに造作された事実ということになり、ひいては大化改新自体の否認にまで至るのではないかと思われるほどの口気である。結論の重大さに鑑みて諸方面からの一そう精緻な検討のなされることが期待される。

泉谷氏の記紀神話形成についての所論は、天照大神と素盞嗚尊との原型を、賀茂伝説にいう玉依日女・玉依日子の関係に擬して、ヒルメ・ヒルコという対偶神にまで還原し、かつその背後に穀霊信仰を想定しようとする甚だ創見に富んだ考察であるが、その穀霊信仰が日神信仰へと推移するに伴ってヒルメ・ヒルコが天照大神と素尊とに発展したとする、その過程とその実年代の推論にはいささか形式的に割切り過ぎたところがあり、さらに慎重な検討を必要とするであろう。その点上田氏が祭官中臣氏の成立の問題と関連して、日奉部や日置部の性格について論じているところとも関連するが、天皇家が日神の子孫であるとして天照大神を高く標置し、日奉部や日置部が置かれるようになったのはよしや新しくとも、民俗信仰としての日神崇拝は穀霊信仰とともにもっと古い時代に遡らせ得られるのでないかと考えられる。

最後に小林氏の「隼人造籠考」はこれまでもっぱら宮門警固乃至俳優（わざおぎ）に関連してその職能が考えられていた隼人は、その始祖伝説の上からも籠を作ることをその生業にしていた部族ではなかったかという興味ある新見解を立てている。最近古代技術史について好著をものされている同氏にしてはじめてこの点に気付かれたものと思われるが、考古学者の立場からしては、ただの文献史料だけでなく何らか遺蹟あるいは遺物の上からするその裏付けが望ましいものと思う。

言及できなかった論文にもそれぞれ注目すべき論旨が認められるが、紙幅の都合これを割愛せざるをえない。（A5判二九四ページ　塙書房発行　定価一六〇〇円）

（京都大学教授）